Japanese Association for Tibetan Studies

日本西藏學會々報

第十五号

Report of the Japanese Association for Tibetan Studies

No. 15

Oct. 30th., 1968

昭和四十三年十月卅日発行
編集発行人　三上諦聴
　　高橋盛孝
発行所　吹田市千里山
関西大学東西学術研究所内
日本西蔵学会

日本西蔵学会会報論文総目録

第一号〜第十五号

第1号（昭29・5・1）
石浜純太郎　西蔵研究文献目録について
山口　益　フランスに於ける初期の仏教チベット学について
第2号（昭30・10・15）
壬生　台舜　河口コレクションに就いて
第3号（昭31・9・20）
酒井　紫朗　家蔵チベット蔵外仏典の覚書
第4号（昭32・10・25）
多田　等観　ラッサ時代の青木文教さん
佐藤　長　京都における青木先生の二人の弟子
中根　千枝　青木文教先生の御逝去を悼む
第5号（昭33・9・25）
多田　等観　パルカンについて
佐藤　長　木村肥佐生氏「チベット潜行十年」を読みて
第6号（昭35・3・31）
多田等観・高崎直道　東大蔵　ラサ版大蔵経について
西田　竜雄　チベット語新造語彙について
第7号（昭35・10・14）
北村甫・西田竜雄　チベット文字転写とチベット語表記
第8号（昭36・10・30）
稲葉　正就　チベット仏教史の研究
第9号（昭37・10・30）
高橋　盛孝　賢愚経探査記
小島　文保　チベット仏伝画比較考
高崎　正芳　シッキムのチベット学研究所
第10号（昭38・10・30）
松長　有慶　チベット大蔵経の密教経軌分類法の典拠について
矢崎　正見　一会員よりの私信（本会に対する二、三の希望）
第十回大会研究発表レジュメ（略記）
壁瀬（大印派と根本思想）芳村（チベット史の中世）岡崎（西夏史籍考）
第11号（昭39・8・30）
ソェナムギャツォ　大乗と小乗（要旨）
第十回大会記事（略）
西田　竜雄　チベット言語学における二、三の問題
第12号（昭40・10・30）
椿松　源一　躍進するモンゴル人民共和国の現状について
金岡　秀友　蒙古文菩提行経における梵語語彙
第13号（昭41・9・30）
壬生　台舜　河口慧海老師の生誕百年を迎えて
稲葉　正就　王統鏡に伝えるトンミの著作
第14号（昭42・10・30）
小玉　大円　ラムリムタルゲンについて
小川　一乗　宗喀巴著「秘密道次第論」第一章について
小島　文保　法華経六番神咒考
第15号（昭43・10・30）
高橋　盛孝　石浜会長の印象

右の外大会記事、住所録、新刊紹介、会員活動会員消息などあり。略す。

石浜会長の印象

石浜純太郎先生の年譜は、同先生古稀記念「東洋学論叢」にのせられている。今ごく大体を略記すると、明二一・八・二七大阪にて誕生。明四三・三・三〇父豊蔵氏を失い、丸石製薬合名会社に入られた。四四年、歩兵八聯隊に一年志願兵とし

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

て入隊された。同先生のお話では「隊では随分苦しめられたが、自分の人生観を一変した」とよく言われた。富裕な生涯を送ってこられた同先生にとっては、随分の荒行だったに相違ない。

明三九・三・三一市岡中学を卒業され、四一・八に早くも東大を受験、四十数名中理科の亀田氏とたった二人だけ入学を許可せられた。この頃から非凡な才能を発揮され、岡田正之先生以外の先生は眼中になかったらしい。東大で出ていた「漢学」という雑誌にロシアの蒙古研究の文献を紹介されたのもこの頃だったかと思う。「漢学」誌は小生の大学生時代（大正十二卒）には自由に見られたが、今は検討するよしもない。

先生と漢学の結びつきは古く、父君は実業家ではあったが漢学には特に熱心で、明三〇・四先生十才の時、泊園書院の藤沢南岳先生の塾にいれられた。南岳先生が散歩しながら詩作にふけって居られる時、よくお供をされたと聞いている。明三五・一二・八姉上のカツ様が藤沢黄坡氏に嫁せられ、それ以後藤沢先生の塾や関大での講義に出講される様になってからも、たえず黄坡先生の御仕事を助けられた。石浜先生は後年、関大、阪大、外大、京大、竜大、帝塚山大などで講義をされたが、ほとんど講師のみで、あくまで自分は浪華商人で、町人学者として一生を送りたいと常に言って居られた。大阪の実業家で漢学に趣味をもっている人は現在でも少くないが、多くは素人学者の域を出ない。先生は稀に見る奇才を深く蔵して、おごらず、高ぶらず、どんな無智な人々とも快く談話され、いつも先生をお訪ねすると、あらゆる専門の学者、学生はもとより多数の素人がつめかけて居り、だれにも喜ばれる様な話題に花がさき一座の中心となられた。一般の大学教授には到底まねのできない大度量であった。しかも専門の学者と対談したり、新刊の書を批評したりする際のほとんど全部にいち早く目を通され、極めて公平な批判をされ、それを伺うだけでも耳学問になった。その上、貧書生に対して貴重な書物をどんどん貸与され、時には「自分で読みたいときに手元にない」とこぼして居られた。

西夏の学には早くから手を下され、殊にネフスキー氏が大阪に来られて以後はいくつかの論文を次々に出されている。当時のとぼしい資料では、一頁に数個の文字しか解読し得なかった。それを原本と思われる漢訳大蔵の中からさがし出して、ほぼ解読し得るまでにされるには大層な努力が必要だった。私も始め、いろいろ材料を貸与されたり教えられたりしたが、到底ついて行けないとわかって、次々に発表される論文をただ驚きを以って読むに過ぎなかった。西田竜雄君が京大に入りすぐれた論文を先生に提出する様になった頃、よく噂に上ったものだった。

学会を作ってよく後輩を誘導されたことも、先生の偉大な業績の一つである。大阪に静安学社が出来たのは昭和二・九頃で、浅井恵倫、笹谷良造ネフスキ氏と筆者等が、懐徳堂の旧講堂で毎月（夏冬は休み、年八回位）開催され、二、三人の講師が話し、あとは座談に花をさかせた。最もたのしい思い出となった。昭二八西蔵学会が発足し、先生の学問、交友の広さが内外の学者の認める処だったので、直ちに会長に推され今日に及んだ。

三、四年ばかり前から脳出血の発作があり、休養して居られたが、本年二月十一日急に容態が悪くなり、御家族、友人等に見守られつつ死去された。

生前に書かれた多くの論文は単行書、雑誌等に

◇第十五回大会記事

於・大正大学
昭和四二年一一月一〇日

〔研究発表〕

中井英基　十七世紀初頭のラダックにおけるヘミ寺建立の史的意義について

小玉大円　パンチェン・ラマ第四世作「菩提道灯論釈」

上山大峻　法成述「瑜伽論手記」並「同分門記に」ついて

高橋盛孝　唐代長安の中国語と西蔵対音

〔講演〕

芳村修基　アメリカ及びソビエットに於ける西蔵研究

同日参会者に、壬生台舜氏編・大正大学所蔵「チベット大蔵経ナルタン版論疏部目録」一九六七と題する大著を贈られた。既刊各大蔵目録との出入を詳記されて居り、研究者にとって極めて有意義の著と思考する。著者幷びに学校当局に対し厚く感謝の意を表したい。

するどい洞察力と、僅かな誤りも容赦しない厳正さには、我々一同驚きと畏敬の念を禁じ得なかった。西域学は恐らく先生の最も得意な領域で、当時東亜欧米各国で次々に発刊される著書・論文の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

残されて居るが、恐らく先生の胸中にはこれに数倍する原稿を抱いて居られたものと思う。

以下私事にわたって甚だ恐れ入るが、西蔵学会は年々順調に進み、会員も二百名に近い。次回、京大に於ける大会で、会長の推薦の外に、従来三上、高橋等によって事務を推行していたが、高橋も近く停年に達する上に、三上君はもともと西蔵学専門でない上に、関西大学には西蔵語の講座もなく、将来、西蔵語を研究しようという学生も現われる見込みがないので、事務所も適当な研究所なり学校なりに移していただきたいと念願している。

長年にわたり、不行届な点、幾重にもお詫びをし、将来、若い会員諸氏によって、日本の西蔵学の目覚しい発展を遂げられることを希望しつつ筆をおく。(昭二三・九・二八　高橋盛孝)

著書・論文

〔前年度補遺〕

〔安藤仁介　中印国境紛争と国際法—東部境界とマクマホン・ライン—(京都大学教養部政法論集第一号、昭42・3)〕

磯田熙文　サンスクリット語の prefix とそのチベット語訳の問題(1)　東北印度学宗教学会論集一

岩本　裕　㈠Sumāghadhāvadāna neugearbeitet herausgegeben. Kyoto 1968 中同テキスト蔵訳幷びにその研究 (101—130) ㈡クリキン王の十夢に関する西蔵の所伝の検討梵本漢訳の所伝との比較、その問題点など(同書 199—208)

上山大峻　㈠大番国大徳三蔵法師沙門法成の研究下(東方学報 三九冊) ㈡チベット訳「楞伽師資記について」(仏教学研究 二五・二六合併号)

大類　純　㈠バガヴァン・ダースとマドゥスーダン・ダットにおける自治の哲学(東洋学研究二号) ㈡最近の北インドにおける革命的蜂起の情勢(アジア経済旬報 六九八号) ㈢梵和大辞典 第十二分冊(鈴木学術財団) ㈣印度仏蹟発掘およびインド・タイ文化調査覚書(鈴木学術財団研究年報三号) ㈤新中国の宗教の方向づけ—生と死の意味論(アジア経済旬報 七二〇号)

岡崎精郎　㈠宋初における夏州政権の展開と貿易問題—西夏建国前史の一節として(追手門学院大学文学部紀要第一 昭四二・一二) ㈡タングート慣習法と西夏法典(田村博士頌寿東洋史論叢 昭四三・五)

金岡秀友　㈠梵蔵蒙対訳寂天造菩提行経般若波羅蜜多品(西義雄編「大乗菩薩道の研究 所収) ㈡モンゴル仏教教団形成の中心課題(芳村修基編「仏教教団の研究」所収) ㈢The Linage of Viśuddhi-pada thought in the Prajñāpāṇamitārayaśatapañcaśatikā (印仏研 三二号)

川喜田二郎・高山竜三　アジアを見直す(日経新書) 一九六八年 の中に「チベット文化論」

小島文保　スタイン蒐集敦煌本法華経断簡について(仏教学研究 二五・二六合本 昭四三・五)

小玉大円　ラムリムタルゲンについて(日本西蔵学会会報 第一四号)

酒井真典　㈠大日経息障品の理解(密教学会報 第七号) ㈡密教の人間観(日本仏教学年報 昭四二)

佐藤　長　パグモドゥ王朝の衰頽過程(田村博士頌寿東洋史論叢)

田村実造・今西春秋・佐藤長「五体清文鑑訳解」下巻 総索引 昭和四三・一

高崎直道　智光明荘羅経覚え書　駒大仏教研究紀要 二六号 昭和四三・三

高橋盛孝　西蔵文字を用いた長安古音(関西大学東西学術研究所紀要㈠　古事記上巻に見える歌謡と呉音の一節)

中村　元　㈠チベットに見る結婚式の歌謡(在家仏教 一六四号 昭四二・一一) ㈡ダライ・ラマとの対談(大法輪 昭四三・五 三五巻 五号)

長尾雅人　維摩経(蔵訳)の和訳(世界の名著第二巻大乗仏典所収) 中央公論社 昭四二・一二

羽田野伯猷　チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面(東北大、日本文化研究所 第四輯 一九六八・三)

平川　彰　初期大乗仏教の研究 春秋社 昭四三・三

福田亮成　㈠S'ri-Vajra-Maṇḍalālaṃkāra-nāma-Mahātantrarājā の構造(東洋学研究 第二号) ㈡理趣諸経の成立過程について—特に広本畧本の関係から(印仏研 一六の二)

藤沢義美　南詔王権の確立と対吐蕃関係(岩手大学教育学部研究年報第二七巻第一部・二部 昭和四二・一二)

矢崎正見　蓮華生とチベット仏教(立正女子大学

NII-Electronic Library Service